

3. 関心・意欲・態度

「関心・意欲・態度」は、指導要録の観点別学習状況の評価項目の中にあります。特に、自分とのかかわりで学ぶ生活科では、「関心・意欲・態度」といった情意面を重視しています。対象への興味・関心を積み重ねていくにつれて、その対象に意欲的、継続的にかかわろうという態度が形成されていきます。

関心・意欲・態度とは

身近な環境や自分自身に関心をもち、進んでそれらとかかわり、楽しく学習や生活をしようとする力を関心・意欲・態度と言う。

生活科は、単に多くの知識を覚えることではなく、学習や生活に生きて働く力を育てることを目指している。身近な環境へのはたらきかけとともに、学習したことをその後の活動や自分の生活に生かす実践的な態度を大切にする。

対象とのかかわりの中で、自分でかかわろうとしたり、行動しようとしたりする意志が「関心」である。

また、熱中してよりよくかかわろうとする努力のことを「意欲」と言う。

「態度」とは、その場限りの興味や関心と違って、かなり持続的なものであり、いったん形成されるとかなり長期にわたって維持されるものである。

— 実践から —

ザリガニの飼育やアサガオなどの花の栽培活動では、その対象を眺めて観察する（「関心」をもつ）ことからはじまり、手で触ったり、世話をしたりしながら、次第により親しく接しようとしていきます。（「意欲」が現れる）

このような活動の過程で、子供は徐々にそれらに心が魅かれ、親しみや知的な好奇心をもつとともに、動植物の成長の変化に気付きながら驚いたり、発見したりするようになります。このような情意的なかかわり方から知的な認識が芽生えてきます。さらに、長期的にかかわることで、その子らしい対象へのかかわり方が生まれてきます。（「態度」が身に付いた状態になる）